特集 国際協力の即戦力
ーシニア海外ボランティア最前線ー

開発途上国の人々のために、自分が持っている技術や長年の経験を生かしたい…そんな強い意欲と情熱を持った40歳から69歳までの世代を途上国に派遣するJICA事業が「シニア海外ボランティア(SV)」です。1996年に始まり、年々、派遣者・派遣国数ともに伸びてきましたが、シニア世代の増加に伴い、さらなる注目を集めています。長年の経験に裏打ちされた日本のシニア世代の確かな技術や豊かな知識が求められている途上国において、新たな人生の扉を開いたシニア海外ボランティアの活躍をご紹介します。

地球の裏側で大奮闘！

いんげん豆の収穫風景

及川勝SV(アルゼンチン／農業一般(小豆栽培))からの活動レポート

私はアルゼンチンへ赴任し約10ヶ月になります。首都ブエノスアイレスから北へ1600kmのサルタ州サルタ市(標高は1200m、南緯23度、南回帰線の近く)に住み、「小豆の栽培」というテーマで活動しています。

アルゼンチンの産業は牛肉をはじめとする畜産物や小麦などの穀類、果樹などで、自給率は世界でも高い国です。各種資源も豊富で自然鉱物にも恵まれています。

サルタ州は畑作地帯で豆類(大豆、いんげん豆)栽培が多く、畑作物栽培面積は100万ha、特にいんげん豆はほとんどが外国への輸出向けに栽培されています。

豆類栽培の経営転換を図るため、輸出用の小豆栽培を促進するのが今回のテーマですが、栽培戸数は4～5戸、面積は400ha程度で、まだスタート地点です。

新規案件なので、気象表の整理、土壌条件や豆類栽培の実態など、基本的な現地情報がなかなか集まらずその収集に苦労しています。

北海道よりも広い農用地面積の中に農家が点在しているので、どの様に技術や情報を伝達するのか、こちらが送った情報がどの程度届いているのか、時間と約束に振り回されながらあまり期待せずひたすら待つことなど、いろいろな問題を抱えながら活動しています。

農業とは、栽培技術とその地域の自然・土地・気象条件との調和を図っていくことですから、地域の人達と英知を結集していかなければなりません。

要望される情報を提供しながら、1年目の今年の栽培実態とその結果を見つつ、2年目にあたる来年に期待し、いろいろと作戦を先取りし計画を立案しながら活動しています。

今年の夏は、ラニーニャ現象とかでこの地は異常気象に見舞われ肌寒い日が続いています。平年は夏真っ盛りのようですが、朝はフリースが必要な日もあります。1月に入り自宅から見えるアンデス山脈裾野の山頂が雪(雹)化粧しました。

サルタ州は隣国ボリビア、チリ、パラグアイ、ブラジルに国境を接しており、音楽・楽器・服装・手工芸品などでインカ帝国文明の影響を強く感じます。市の中心街にはいろいろな手工芸品(羊毛、アルパカ、リャマ等の毛製品)の土産店が軒を並べています。

アルゼンチンはタンゴで有名ですが、北部のサルタ州へ来るとフォルクローレの音楽が有名です。各地で色々な地域文化に触れることが出来るのも、このような機会だと思います。

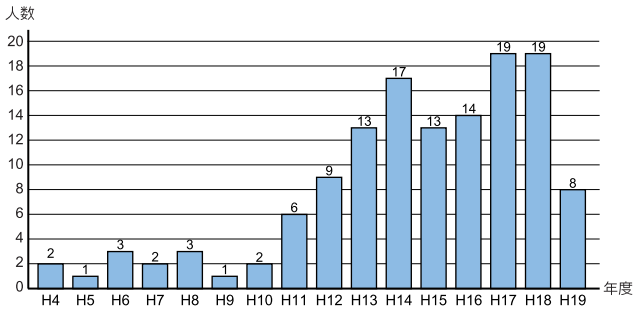
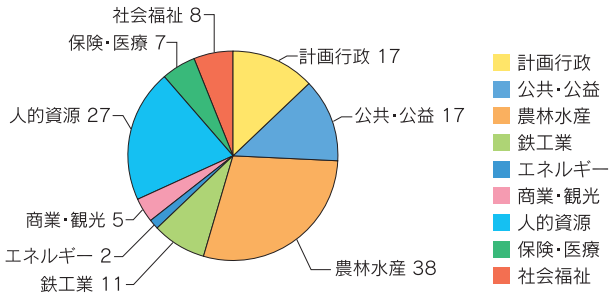
それぞれの国の良い点、改善すべき事、日本が外国から学ぶべき事などを整理しながら生活することも大切かなと思っています。

外国生活のポイント、安全第一に早くその地に馴染んで、街の中を闊歩することです。

若い人そして現役を引退した人も世界へ羽ばたくチャンスが沢山あります。

今後の人生の挑戦に幸あれ。

北海道の年度別派遣者数(2008.1.31現在)※本邦出発日を起算日とする



北海道出身シニア海外ボランティア分野別派遣者数132名